

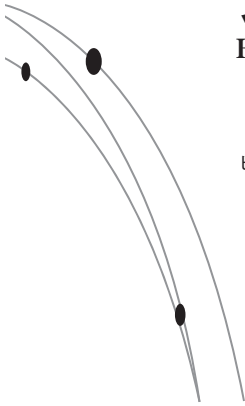
連載

フィールド・アイ Field Eye

ビクトリアから——③

ビクトリア大学 遠藤 貴宏

Takahiro Endo



日英日加と移動した研究者の軌跡から「労働」を振り返る (3)

最終回の今回は、アジア太平洋センター、通称 CAPI (Center for Asia-Pacific Initiatives) における「労働」に焦点を当てたいと思う。CAPI でのさまざまな活動の特徴は、アジア太平洋地域に関する、学際的な学術的活動という点にある。そのためセンターに所属している研究者たちのアカデミックバックグラウンドは多岐にわたる。いわゆる文化系の学問領域だけにとどまらず、サイエンスにかかわる領域の研究者も在籍している。もともと自分の問題関心の1つとして、地域 (region) と経営学研究というものがある。地域としての日本に関して、経営学上の関心が非常に高まっていた時期があった。第二次世界大戦後に日本は驚異的な復興を果たし、高度経済成長期を経て、バブル経済に突入した。日本最強伝説とも言われるような時代があったのである。しかしながら、1990 年代初頭にバブル経済が崩壊した。その後は長い間低迷の時期があった。ただし、特定の産業や企業に目を向けてみると、必ずしも低迷しているわけではなく、中にはその後も安定成長を遂げたような企業もある。こうしたことを踏まえると、色々と興味深いリサーチテーマが出てくるかと思う。例えば、バブル崩壊後にも安定成長を遂げた企業の中でも、いわゆる日本型の人事制度を保持したものと、日本型の人事制度を全否定したものと、全く異なるタイプの企業が存在している。こうした企業の違いはどこにあるのだろうか？

もともと地域としての日本に興味があった自分が最初に CAPI の集まりにあって驚いたのは、第二次大

戦中の日系人の収容に関していかに自分が何も知らなかったかということであった¹⁾。CAPI でも、直属の先祖が収容所に入れられていたという日系移民の血を引く方々を中心に、誰がどこの収容所に入れられたのかといったデータベースの構築などをはじめ、重要な学術的作業が進められているのを知った。こうした視野を広げてくれる機能を内蔵している CAPI であるが、学術年度が始まる前に、所属する研究者たちが話し合いの場集まり、ある程度のすり合わせが行われる。その上で、自然発生的にクラスターが形成される場合もある。複数の研究者が共通の関心のもとに実施されるパネルディスカッションなどはそうしたものの具体例である。また、個々の研究者が単体で企画するような学術活動もある。時事問題もあれば、ある程度長期間にわたって繰り返し観察されているような問題に関して専門領域の研究者を学内外から呼んできて話し合うセミナー、リーディングクラブ、イベントなどを企画・開催することになる。

新しい取り組みも行われつつある。昨年度は、アジア太平洋地域に関する諸現象を扱っているビクトリア大学に所属する大学院生を 10 名ほど集めての研究発表セミナーを初めて開催した。法学、経営学、政治学、社会学、言語学、ライフサイエンスと多岐にわたる発表であった。「背景知識を補充せざるを得ない者 (=「本題」に直接入れない者) 同士を束ねるコミュニティ化」と「暗黙知の共有」という点で大きな成果があったと思う。

アジア太平洋地域への関心は、カナダの状況を考えてみると、道半ばといった状態である。そのため、アジア地域に焦点を当てた研究を大学院生が行うことはそれなりに苦労があると思う。こうしたアジア太平洋地域への関心が必ずしも高くないということが、研究活動にどのような意味を持つのだろうか。おそらく、次のような状況を想定して頂けると臨場感を持って理解して頂けるのではないかと思う。さて、読者の方々にカナダに関する質問である。①首相の名前を教えてください、②首都の名前と場所を教えてください、③人口はどのくらいであるか、④この 10 年で最も大きな政策課題トップ 3 は何だったのでしょうか？ さて、恐らくであるが、①、②、③に関しては結構と多くの方が正答にたどり着いたのではないかと推察している。対照的に、④に関しては、おそらくパッとどころか、少し考えてみても出てこないという方々が大半

だったのではないかと思う。しかし、ある程度の間カナダに在住・関連していれば④に関しても、自分なりの見解をもつに至るはずである。さて、上記のような質問は、いわば特定の国・地域に関しての背景知識の一角をなすものとして考えられる。オーディエンスに背景知識があるかないかで、文章やプレゼンテーションでどうやって「本題」に入るか、そのやり方がだいぶ異なってくると思う。背景知識が補充されないまま「本題」に入ったら、オーディエンスはどう反応するだろうか？ 言うまでもなく、研究に関心を失ってしまう可能性が極めて高いだろう。オーディエンスに向き合い、背景知識をまずは丁寧に補充して、ようやく「本題」へ入ることが必要になってくる。まとめると、カナダでアジア太平洋地域に関する現象を研究する上では、背景知識を解説してから「本題」に入らざるを得ないという苦労があるのである。アジア太平洋地域に焦点を絞った研究活動をしている大学院生を集めて、つながりの「場」を提供することで、コミュニティ化の端緒を得たという感覚を私は持ったし、参加した大学院生からもそうした声が聞かれた。

また、暗黙知の共有は、いくつかの種類があるようであった。まずは、発表の仕方から、いかに背景知識を織り込むのかという点で有用な相互参照事例がいくつもあった。月並みな言い方であるが、立ち入りすぎず、かといって、省略し過ぎず。この絶妙なポイントをついてきた発表が少数ながらあり、残りはアジア太平洋地域のディテールが偏重する形になってしまい、「本題」がやや消化不良に終わるものであった。地域に軸足を置いたセミナー発表を行うことで、こうした「背景知識の統合の仕方」について学びがあると個人的に思ってもいなかったのも、とても参考になった。また、もう1つの種類の暗黙知としては、主にデータ収集に関するものである。アジア太平洋地域とひとくくりには無理があるのは承知であるが、押し並べていうと、カナダに比べて大きく環境が異なる部分が多く、時として壁となって立ちちはだかる。特にデータ収集を終えた大学院生からの発表では、データ収集先で「やるべきこと」「やるべきでは

ないこと」などが披露されていたのが印象的である。

さて、ビジネススクールでも内外からの訪問研究者を歓迎しているが、特にCAPIでは日本を含むアジア太平洋地域からの（サバティカルなどを含めた）訪問者を積極的に受け入れている。特に、私自身が力を入れているのは、日本とカナダをつなぐような活動である。そうした活動にご興味があれば、是非ともご相談いただければと思う。例えば、新潟大学からいらしていた日本酒学センターの岸保行さん（1年間滞在）には、日本酒に関するイベントをビクトリアで行うためにさまざまなサポートを頂いた。また、成蹊大学からいらしている浜松翔平さん（2年間滞在）には、日本における中小企業のあり方や、昆虫食の動向について情報共有を頂いた。

私の研究関心ともかかわるが、バブル経済崩壊後の「失われた十年」とも言われた日本への経済的な関心は、高度経済成長を遂げていた頃の一昔前に比べるとやや下火の状態にあるかもしれない。しかしながら、ある国への興味関心は、経済だけではなく、社会・文化・政治といったさまざまなチャネルから捉えられるべきだと思う。そうした意味でもCAPIの学際性は「地域への関心」を多角的に捉える上で、とても刺激的な環境であると言える。また、こうした地域間の連帯を促すような活動は継続していくことが極めて大事だと思う。そうした継続したつながりにより、相互理解が維持されるだけではなく、ますます深まることを祈念して筆を置く。

- 1) カナダとは状況がだいぶ異なると思うが、米国の日系人の収容を描いたジョージ・タケイの漫画は当時の状況を知る上では非常にアクセスのしやすい書籍だと思う。

えんどう・たかひろ ビクトリア大学・ガスタフソンビジネススクール、ジャリスロスキー基金CAPIチエア（日本）・准教授。主な論文に“Does Japan Still Matter? Past Tendencies and Future Opportunities in the Study of Japanese Firms,” *International Journal of Management Reviews*, Vol. 17, No. 1, pp. 101-123（共著、2015年）など。組織分析専攻。